

## スポーツ医科学科の誕生 – その生まれ出る苦しみ –

天羽 敬祐

Keisuke AMAHA

### プロローグ

「国士館大に新しい4年制の学科ができるようなんですが、先生行って手伝ってやりませんか」

当時、東京医科歯科大の医学部教授だった僕のところへ、医学部長の佐藤達夫君がこんな話が持ち込んできたのは、平成8年の3月頃だった。

僕が定年を迎える二年前である。定年後をどうするかは、漠然と考えてはいたがまだはっきりした計画はなかった。

国士館大については全く無知だった。それまで横浜市大、東北大、医科歯科大と医学部畑を歩んできた僕には、国士館といえば右翼とか体育系とかいう言葉が思い浮かぶ程度の知識しかなかった。知識が無いから持ち込まれた話の内容の良し悪しは判断できなかった。

しかし国士館大に救急救命士のための学科が本当にできるのか、甚だ疑問に思ったのは確かである。「考えておきます」と一応佐藤医学部長には言ったが、正直の所、行く気はあまりなかった。

数日後、当時の文部省の事務官から電話が入った。「先生、適任ですよ。行ってやって下さいよ」その頃、僕は文部省の大学等設置審議会など幾つかの委員をしていて、この事務官は顔見知りで、大そう仕事熱心な男だった。

昔の国士館とは違います、と事務官は何度も強調

していた。

平成8年5月31日午前、国士館大の松島理事長、大門代表理事以下数名の理事が東京医歯大を訪れ正式に学科開設の援助を依頼してきた。

新学科の構想は以下のようなようだった。

国士館の体育学部内に高度の知識を持つ救急救命士を育成する4年制の新学科を作る、建物は新築し、必要な設備などは出来る限り当方の要望に沿って整える、開設は平成10年春、等々である。

僕の定年は平成10年3月末だから時期的にもちょうど良い。

もちろん本邦初の試みである。やり甲斐がありそうだと思った。

僕は承諾した。

退官後も同じ医療畑で働くより、苦労は多いだろうが少し違った領域で働いてみるのも新鮮な経験ができて面白いかも知れない、と考えたからである。

### 挫折

平成9年。穏やかな正月だった。1月の17日、新学科に就任予定の教職員が集まって、表参道の南国酒家で新年会を開いた。新しい学科への希望と期待に、皆、話が弾んだ。

一年半後の学科新設を目指して僕はゆっくり活動

を開始した。一年以上もある、と思っていた。教職員の入選、カリキュラムの作成、実習器具の選定、建物の基本的な構想などなど、やることはいくらかもあったが、まあ、のんびりやろうと気楽に構えていた。

だが世の中そんなに甘くない。数週間後、深刻な問題が起きた。

国士館には、政経、文、工、体など五つの学部があったが、新学科は体育学部内に設置することになっていた。ところが、体育を除くすべての学部が新学科設置に反対を表明したのである。

学科新設は理事会の決議である。理事会は必死に各学科を説得した。

が、一度燃え上がった反対の火の手はなかなか消せない。理事会は力尽きてとうとう2月12日の会議で開設を一年先送りにすることを決めた。国士館の開設準備室にいた野田牧生氏がその日のうちに僕にこの話を伝えてきた。

僕は激怒した。

「腰抜け理事会め！自分で決めたことを自分で反古にするとは何たるザマだ」

国士館にどんな内部事情があるかは知らない。しかし少なくとも理事会は、大学の進路を決める最高の決議機関ではないか。その決議が、一年も経たないうちにまた同じ理事会で変えられてしまう。許しがたい背信行為だ、と思った。

翌日の夕方、大門代表理事らが医科歯科大の僕の教授室に來た。延期の理由を詳細に説明し、何度も詫びを述べてから帰って行った。

皆が帰ってから僕は秘書も帰し、暫く一人で教授室に残っていた。一人になって今後のことを少し考えたかった。

ぼんやりとパイプを吸いながら、教授室の窓から夕暮れの御茶ノ水橋の雑踏を見ていた。

迷っていた。

新学科の計画は挫折した。どうしようか。

もうすこし様子を見るべきか、断るべきかー。

しかしそれにしても、大学の理事会が決めて他の大学にまで正式に援助を依頼した計画を、そんな

に簡単に変えられるのか。常識的には考えられない事態で、大学の社会的信用は失墜するに違いない。

しかし恐らく国士館には出来ないだろう。こんな意気地のない理事会ではどうせ一年後もだめだろう。早いところきっぱり縁を切って、いま誘われている病院へ行くことを考えたほうが良いかも知れない、と思った。だが辞意を申し出る前に、もう一度松島理事長に会って話を聴き、僕の言いたいことを言ってからじゃないと、何となく腹の虫が治まらない、とも考えた。

僕は松島理事長にアポを取るように秘書にメモを残し、部屋を出た。

#### 「一年後に申請いたします」

平成9年頃の僕は多忙だった。麻酔科教授として毎日の臨床と研究の指導をし、その外に手術部長、救急部長、集中治療部長、それに幾つもの院内の委員長をやり、学会や文部省や厚生省の仕事も多かった。

一週間の内に、福岡、大阪、札幌と出張したこともあった。

そんな過密なスケジュールの間隙を縫って、松島理事長に会ったのは、一週間後の2月18日の夜、場所は世田谷の理事長室だった。

「ご迷惑をおかけして申し訳ありません」

小柄な理事長は小さな声で何度も同じ詫びの言葉を繰り返した。

飾り気のないトットツとした話しぶりに、新学科反対派と僕との間に挟まれて、動きの取れない理事長の苦悩が滲み出ている。

誠実そうな老人で、好々爺という印象だった。また何となく憎めない人だ、とも思った。

僕は理事会の無責任さを激しく非難した。

が、いくら非難しても畢竟、話はそれまでで進展はない。

理事長の口も重い。いうべき言葉がなかったのだろう。

「この儘では納得できません」

最後に僕はやや強い口調でいった。一年後というなら、それを保障する証を示して欲しい。一年、また一年と延ばされるのはやり切れない。国士館がある程度はしっかりした見通しをつけてくれないと、我々としても対処に困る、と僕はいった。

「分かりました、一週間ほど待って下さい」

松島理事長のこの言葉を聞いてから、僕は理事長室を出た。夜の風が肌を刺すように冷たかった。

2月26日夜、松島理事長、三浦学長などと湯島のガーデンパレスで会った。開設準備室の野田さんも同席した。

「これで何とか納得してください」

話が一段落すると、松島理事長はそういつて一枚の紙を僕に渡した。

理事長印の付いた松島博の名で、「平成10年4月に救命健康学科の開設申請を行います」と書いてあった（当初、新学科の名称は救命健康学科だった）。

平成9年申請を1年延ばし、その間に学内の反対派を説得し、平成10年に新学科の開設申請をするというのである。

理事会に非があるとはいえ、一年延期を認めてしまった現段階で出来ることは、この理事長公印のあるお墨付きを頂くのが精一杯なのかも知れない。まあ、こんなところで手を打つか——。それまでの猛々しい僕の闘争心はこの一片の紙切れでかなり軟化していた。

## 一本の電話

平成9年3月3日、夕刻、大門代表理事から電話が入った。

電話の内容は概要次のとおりだった。

（理事長が確約書を出したが、学内の情勢は大変厳しい。一年後に申請できる見通しは全くない。これ以上ご迷惑をかけることはできないので、この際先生も新学科設立の計画から撤退されることをお勧めしたい）

僕は自分の耳を疑った。何ということだ。先週、

理事長から来年に申請書提出という確約書を貰ったばかりなのに——。

大門氏は僕への親切心から、学内事情を知る人間として敢えて理事長の意向を無視して忠告してくれたのだろう。

しかし、この撤退勧告は沈静化していた僕の闘争心に再び火をつけた。

僕を含めて何人かの人生を変えるかも知れない大事を、こうも軽々しく変転させる理事会のいい加減さ、無神経さに腹が立ったのである。

よーし、こうなりゃ徹底的に戦ってやるぞ、と思った。

翌日早朝、僕は出張で九州福岡のホテルにいる大沢英雄先生(当時、体育学部長)に電話した。

大門氏からの電話の件を話し、忌憚のない学部長の意見を聞かせて欲しい、といった。もし大沢先生も大門氏と同じ意見なら即刻、国士館から手を引く積りだった。

だが大沢先生の考えは大門氏とは違っていた。

（私も頑張るから、先生も撤退など考えず頑張ってください）

大沢先生とは10分ほど話したが、この会話は、僕の気持ちに少なからず安らぎを与えてくれた。

その日の夕刻、新学科就任予定者の全員に文部省近くの霞山会館に集まってもらい、今までの経緯を詳細に報告した。もちろん、大門氏の電話のことも話した。そして最後に、もしこのまま新学科の話がダメとなれば不本意だが理事長の確約書をもとに法的に争う積りです、と言った。本当にやる積りだった。

長期戦になる、そう思った。

## 新学科設立の願望

国士館学内の軋轢は相変わらず続いていたが、僕らはとにかく平成10年の申請を目指して着々と準備を進めた。野田氏は週に2、3度必ず僕の教授室に相談に訪れ、ついでに国士館の状況を知らせてくれた。彼の飄々とした姿は忘れられない。

国士館の方の進捗状況は思わしくなかった。僕ら外の人間には理事会、体育学部、他学部の反対派が混然と入り乱れて誹謗しあい、反対を唱え、抜き差しならない事態になっているように見えた。僕らと理事との会合も頻繁に行われたが、僕らが理事会の優柔不断をなじり、僕も時には声を荒げて理事長に迫ることもあった。会合の場所は虎ノ門の霞山会館が多かった。今でも僕はあの場所を通るたびに、当時の不快な思い出が甦り、憂鬱な気分になる。

それからの一年は、会合に会合を重ねて得る物は何もなく、記述に値しない。

この間、就任予定者で内科学担当の後輩、藤原秀臣君が国士館の煮え切らない態度に業を煮やして辞めていった。残念だがやむ得なかった。

僕も友人や先輩から、そんなところ早く辞めちまえ、と何度も言われたし、自分でも辞めよう、と思ったことが何回かある。しかし途中で簡単に放り出す訳にはいかなかった。すでに現職を辞めて国士館に来ることを決めている人がいたからである。

それにもう一つ大事な理由は、この学科の新設に携わっているうちに、これが日本の救急医療に革命的な新風を送り込む原動力になるかも知れないと思うようになっていたことである。教職員を揃え、カリキュラムを組み、校舎の見取り図を眺めているうちに、新学科が既成の概念として僕の心の片隅に住みついたようになっていた。

(何としても新学科を作りたい)

いつしかそれは僕の願望に近くなっていた。

## ようやく申請

結局、大門氏が予想したごとく、平成10年の学科申請はできなかった。

憤懣やるかたない思いだったが、ここまできたら最後の決着を見届けないと気持ちの治まりがつかなかった。

大沢学部長の勧めもあって僕と竹中君は平成10年

4月から、体育学部教授として勤務し、学内から新学科設立を推進していくことになった。

憂鬱な毎日が続いた。慣れない環境、先の見えない新学科、臨床を離れた寂しさ、等々、明るい話はなかった。この時期、渡辺剛教授、福本正幸事務官がいろいろと僕の世話をしてくれ、ずいぶん力づけられた。

平成10年2月には体育学部教授会が理事会と学長の不信任を決議したりして紛糾は続いていたが、僕が赴任した頃から事態は僅かづつだが確実に変わってきていた。

敵役だった親愛なる松島理事長は病を得て退陣し、理事も変わり、平成10年4月から新しく西原春夫氏が理事長に就任した。また学内の反対派の勢いも何となく衰退して行ったようだった。

潮の引く時期だったのかも知れない。

と同時に体育学部の新学科を認めようという気運も、少しづつだが芽生えてきたようだった。話し合いが良い方向に向かっているという情報は、時折、福本事務官や渡辺教授が教えてくれた。

その後もいろいろと紆余屈曲はあったが、当初の予定より二年遅れの平成11年4月、ついに新学科の開設申請が行われた。

学内の軋轢を避けるため、学科名も「スポーツ医科学科」という当初考えていたのとは全く違う名前になった。しかし正直の所、もう名前なんかは二の次だった。大事なことは出発させることだった。

開設までの二年間、国士館大理学会とのやり取りを除いて、最も苦労したのは人事だった。とくに臨床系の教官採用は難航した。臨床を辞め教職に就く、熱意のある人材はなかなかいなかった。先輩、同僚、後輩と、あらゆる人脈を使って人探しをしたが適当な人材は見つからなかった。これはと思う人物もたまにいたが面接してみて、大抵はがっかりすることが多かった。

人材難から、一時は学科新設を諦めかけたこともあった。

そこに救世主が現れた。

杏林大理事長の松田博青先生である。彼は数十年来の畏友だが、僕の苦境を知ってすぐに学内から、内科二名と救急医学二名の、講師クラスの優秀な人材四人を送り込んでくれた。救われたと心底から思った。

今でも僕はこの学科新設の最大の功労者の一人は松田博青先生だと思っている。

## 新学科スタート

学生が集まるかどうかという我々の心配は杞憂に終わった。新学科の入試競争率われわれの予想を遥かに超えて高いものだった。

平成12年4月、真新しい4階建ての建物に、第1回の新入生を迎えた。入学式やオリエンテーションなど幾つかの行事があったが、それらの行事の場で僕は、長い苦労の末やっとここまで漕ぎ着けたという感慨はあったものの、喜びはあまりなかった。

(よかったですね、嬉しいでしょう)

と多くの人から言われた。しかし嬉しさはなかった。

代わりに僕の体には適度の緊張感が満ちていた。日本の救急医療を飛躍的に発展させる有為の人材をこの国士館で育成する。その第一歩が始まったんだという思いが強かった。そしてその責任者としての使命感を思っ

## いろいろな出来事があった

厳しい競争率を通過してきた学生約160名と、教職員16名で新学科スポーツ医科学科が始まった。教師も学生も戸惑うことの多い試行錯誤の連続だった。その間、紙面には到底書き尽くせないほど、いろいろな出来事があった。

振り返ってみると、苦しかったことより楽しいこと、感激したことの方がずーと多かったように思う。学生たちは乾いた砂に水を注ぐように知識を吸収し、教職員は熱心に教育した。教員と学生

との交流も実に円滑だった。それは29年間の僕の医学部教授時代には経験したことのない新鮮な体験だった。

医学部の学生とはスポ医の学生のように親しみを込めて挨拶を交わしたり、話をしたことは殆どない。向こうから挨拶されたことも少なかった。

僕だけかもしれないが、今考えると不幸なことだったと思う。

卒業間近い学生と話し合っ

て、人間は教育によってはこんなにも立派に成長するものなのか、と驚いたことがある。高校出たての初々しい新入生が、4年経つと知性と自信に溢れた素晴らしい青年になる。教育の力の凄さを改めて思い知らされた嬉しい経験も少なくない。

悲しい出来事もあった。中でも

梶沢靖弘君の死は最も痛ましかった。梶沢君は医科歯科大の後輩で小児科医だったが、国立病院の医長の席を捨てて新学科に参加してくれた人である。明朗で教育熱心な男だった。

平成15年1月末、彼から病気のことを聞き大変驚いた。入院したときは既に手術適応はなかったが、それでも彼は必死に病と戦った。しかし一年後の平成16年2月8日に夭折した。惜しい人材を失った。

最後に見舞ったとき、「先生もう一度教壇に立ちたいです」、と泣き崩れた彼の姿を僕は終生忘れないだろう。せめてあと2ヶ月命を長らえて、我々が育て上げた国士館大スポーツ医科学科第一回卒業生の晴れ姿を彼に見せてやりたかった。

## 今思うこと

平成9年から11年にかけて起こったあの騒動は一体なんだったのだろうか。僕を含めて大勢の人々が膨大な時間とエネルギーを費やし、怒りと誹謗を繰り返したあの時期は一体何だったのか。

すべては時の流れにかき消され、詳しいことはもう分からない。

あれは恐らくスポーツ医科学科という本邦初の新学科の生まれ出る苦しみだったのかも知れない。逆にいえば、ああいう苦みの過程が新学科誕生には必要だったのかもしれない。そう考えると、あの騒動の頃が何とも懐かしい感じと共に思い出されるのは筆者一人だろうか。

スポーツ医科学科はその後順調に発展し、国士館は今や救急救命士の養成校としては質、量とも本邦のナンバーワンになった。ご同慶の至りである。しかし問題はこれからである。

ナンバーワンであり続けることは、ナンバーワンになることより遥かにむずかしい。本邦最高の救急救命士養成大学の地位を如何に堅持していくか、これからが勝負どころだろう。

現在、東京消防庁など各地の救急への就職には毎年、本校卒業生が数十名が合格している。東京消防庁に同一大学からこれほど多くの合格者が入るのは同庁の歴史始まって以来と聞いている。この勢いで行くと、近い将来、日本の救急救命士の領域を国士館大卒業生が席卷するのではなかろうかと、秘かな期待を持って成り行きを見守っている。それと同時にあの騒動の原因となったこの学科が、計画倒れで生まれてこなかったかも知れないこの学科が、ここまで立派に成長したかと思うと、まことに感慨無量のものがある。

(この文は一個人の主観的な回顧録である。不適切な表現や、年月日、場所などに不正確な点があるかもしれない。お許しを頂きたい)